宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像社会
〒811-3505　福岡県宗像郡玄海町
電話　0940－62－1311㈹
定価　一年送料共　1000円

神具・装束
結婚式場用品
株式会社　井筒
福岡店　福岡市博多区東公園一－三二（〒812－0045）
電話　福岡（九二）六五一－九四五六番
本店　京都市下京区油小路六条北入（〒600－8231）
電話　京都（〇七五）三四一－三三四一㈹－四番

神郡宗像の春を彩る

春季大祭斎行

暖かい春の日差しの下、桜前線の北上と共に当大社春季大祭が、四月一日より二日に亘り斎行された。

この祭りは、江戸時代に書かれた『宗像事蹟考』によると「四月朔日、御作礼祭」と記されており、春の農耕の際に五穀豊饒を祈る祭りである。

三月二十九日祭典に先立ち地元総代並びに協力会役員の奉仕により、参道の幟立てや、各殿舎の注連縄、紫幕張り等の準備が行われた。

三月三十一日夕刻、総社地主祭・宵宮祭を斎行、明日からの大祭が無事斎行されるよう敬虔なる祈りが捧げられ、神職と氏子奉幣使（宗像市・野坂、中村直氏）は参籠に入った。

四月一日、朝から晴天に恵まれ、暖かい日差しの下定刻午前十一時、太田宮司以下神職、氏子奉幣使、鎮国寺立部副住職、主基地方風俗舞、浦安舞奉仕者、氏子総代等が斎館正面玄関前に列立し参進、一同祓舎にてお祓いを受け本殿へと進む。

拝殿大太鼓の合図にて春季大祭第一日祭典が始った。宮司一拝の後三管の調べの中献饌・宗像大社氏子会からの幣帛が供進された。宮司の国家鎮護・皇室弥栄・五穀豊饒を祈る祝詞奏上に続き、宗像大社氏子会代表（氏子奉幣使・中村直氏）が奉幣詞を奏上。

次に主基地方風俗舞を同保存会（田中保政会長）会員奉仕により奉納、続いて玄海中学校二年女生徒（奉由香里・田志由美子・田中佑香・中野里美）の奉仕により浦安舞が奉納され、春の神苑に華麗な平安絵巻が繰り広げられた。続いて各参列者が玉串拝礼を行い祭典は終了した。

四月二日午前十一時、朝から雨の降る中、第二日祭総社祭併せて高宮祭を斎行、海上安全・大漁祈願に併せて若布献上奉告の祝詞が奏上された。続いて去る二月に行われた賢所・天皇皇后両陛下・皇太子殿下同妃殿下への若布献上に際し、厳寒の玄界灘で若布を採取し

げると共に、遺族並びに市・郡民への御加護が祈念された。

また同時刻、儀式殿では講員多数参列の中、交通安全講社祭が斎行され、講員二一七名の今年一年の交通安全が祈られた。

午後二時より拝殿において献茶祭（南坊流小方社中）を斎行、日頃より熱心に茶道を学んでいる巫女の袱紗さばきも鮮やかに、見事な御点前が披露された。

二日に亘る春季大祭は、後半は雨の影響を受けたが、ていただいた奉仕者に対して、感謝状と記念品が一人一人に手渡された。

総社祭終了後、第二宮・第三宮・宗像護国神社春季大祭・交通安全講社祭が各々斎行された。

宗像護国神社春季大祭は、二日朝の強い風雨により拝殿を備えてない同神社神前での大祭斎行を断念、宗像大社拝殿にて遥拝の形式をとり斎行された。宗像市・郡内の遺族百数十名、各市町村長、同議会議長、当大社氏子総代等多数参列の中、護国の英霊をお慰め申し上げた。

各祭典は厳粛裡に斎行され、多くの参拝者で賑わった。

平成十一年若布（順不同）献上採取表彰者（敬称略）

神湊漁業協同組合
高橋義則・永島秀貴

津屋崎漁業協同組合
間　栄市・花田　弘

福間漁業協同組合
広渡和幸・田畑　徳

大島漁業協同組合
田志力男・佐藤精一

地ノ島漁業協同組合
児島　智・村田憲次

鐘崎漁業協同組合は本年度該当者なし

御礼

春季大祭斎行に際しましては、皆様方より心からなる御協賛を賜り厚く御礼申し上げます。

お陰をもちまして、祭典も無事厳粛裡に斎行することができました。

ここに紙面をかり、謹んで御礼申し上げますと共に、皆様方の益々の御繁栄を心よりお祈り致します。

平成十一年四月吉日

宗像大社社務所

各位

余滴

宗像市の中央を走る県道六九号線（旧国道三号線）が同市田熊をぬける処にコンクリート造りの神殿のような建物が雑草の中に半壊し破れ、瓦を風雨に晒していた風景（昭和三十七・八年頃）を知っている人々も少なくなってきた。

この建物は昭和十三年当時「福岡県立宗像高等女学校」がこの地にあり、同校の教諭だった田中幸夫氏（田主丸町出身）が宗像出身の出光左三氏を中心とした人々から浄財を得て『宗像郷土館』を同校の一角に建てられたが、実はこの廃墟の姿だったのである。

田中氏は郷土考古学の先覚者で、郷里の珍敷塚・鳥船塚の発見命名者としても有名な学者であった。

この『宗像郷土館』も建設当時は地方博物館としては最高の評価を受け、収蔵展示品も四千余点を所有し、日本を代表する学者等の見学来館もあったほどである。

この最高地方博物館と呼ばれた神殿造りの『宗像郷土館』も戦後の「宗像高等女学校」の廃校や、田中教諭の転勤等の大きな変遷を受け、放置されることになり、残った資料等は整理され、宗像高等学校に納められた。

しかし、「日本人は死んだ－廃墟の宗像郷土館」と悲痛な文章を残し、昭和五十四年、八十歳で世を去られた田中幸夫氏の話を聞いた時、いま各地に建設される「郷土館」「資料館」等の保存管理と云う仕事の重要性と責任を再考する必要を感じた。

人事移動

この春、神職二名入社につき人事移動を左記の通り行いました。

宮司　太田　可愛　文化財事務局長（兼）
権宮司　神島　定　社務本局長
禰宜　升谷　勝良　経理部長・海洋分局長（兼）電算室長（兼）
〃　山田　幸雄　祭儀部長
〃　石橋　清寿　庶務部長
権禰宜　堤　宏　経理部部長代理
〃　高向　正秀　祭儀部儀式課長・賽務課長（兼）
〃　門司　成人　経理部用度課長
〃　渡邉　秀丸　庶務部庶務課長
〃　杉山　安彦　海洋分局事務局長（中津宮）
〃　宇都宮　勤　電算室長代理（祭儀部付）
〃　伊藤　佳和　庶務部広報課長
〃　葦津　幹之　経理部会計課長
〃　佐々木大治　祭儀部賽務課員
出仕　中原　裕生　祭儀部儀式課員
〃　御床　直之　祭儀部儀式課員
〃　大塚　宗延　祭儀部儀式課員
〃　飛来　孝佳　祭儀部儀式課員

―◇―◇―◇―

非常勤　大野　宗康　庶務部付
嘱託　松本　肇　文化財管理事務局管理課長
嘱託　東　弘　文化財管理事務局員

＝春の風を運ぶ神郡のまつり＝

松尾神社祭

三月十九日、恒例の松尾神社祭が北筑杜氏組合主催のもと斎行された。

例年であれば、境内末社の松尾神社の神前と宗像大社本殿において、酒造報賽の祭典が斎行されるのであるが、当日は生憎の雨となり本殿にて併せて斎行されることとなった。

この祭りは、酒造り開始の時期となる十二月十九日に醸造安全祈願祭が斎行され、それから新酒完醸までの数ヵ月の間、各杜氏が酒蔵の仕込樽と寝食を共にし、杜氏の長年の経験により出来上がった大切な酒を神前にお供えして、新酒の醸成を無事に終えたことを奉告する完醸感謝の祭りである。

祭典は、今年各酒蔵で醸成されたばかりの新酒が神前に供えられ、午前十一時に開始。無事醸成されたことを感謝すると共に各酒蔵の益々の繁栄を祈念する祝詞が奏上された後、各杜氏が次々に玉串を捧げた。

祭典終了後、一同斎館に移り出来たての新酒を囲んで直会が催され、和やかに春の一時を過ごした。

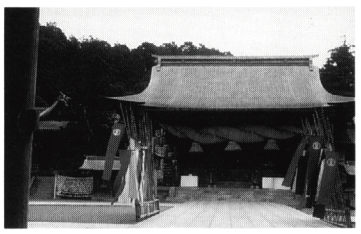
宮地嶽神社祭

境内に桜の咲きほころぶ去る四月四日（日）から六日（火）までの三日間、宮地嶽神社（宗像郡津屋崎町宮司鎮座）の春季大祭「桜花まつり」が、厳粛盛大裡に斎行された。

色とりどりの旗が装飾された四月五日（月）には恒例により当大社升谷襴宜、地元総代五名が参列した。

また民家村自然広苑を中心として、神苑には紫緋桜、染井吉野桜を始め、躑躅、牡丹等の花々も咲き競い、色彩豊かに大祭に色を添えていた。

楼門廻廊では、同社分華学園作品展・盆栽展・春休みスケッチ展等の神賑行事、また四月三日（土）には、KBCラジオ歌謡ショーと多彩な催しが行われ、神郡宗像の春本番を人々に知らせていた。



宮地嶽神社

織幡神社祭

玄海町鐘崎の岬の突端、佐屋形山の山頂に鎮座する『織幡神社』は、古く延喜式名神大社に列せられ、宗像大社の境内摂社の由縁をもつ旧県社である同神社の春季大祭が四月十六日、厳粛裡に斎行された。

春・秋の大祭には例年当大社より奉幣使として神職が参向、奉幣詞を神前に奏上する慣わしとなっている。

鐘崎の人々は、この織幡神社を「しゅくあん様」と呼び、篤い信仰を捧げている。祭典は午前十一時に斎行され、永島宮司の五穀豊穣・海上安全・大漁満足を祈る祝詞奏上、当大社奉幣使の奉幣詞奏上、玉串拝礼が行われ、祭典は無事終了した。

鐘崎は中世以降漁民が定着し、漁場を開拓したと云われ、昔から漁業の盛んな地域として知られ、現在は福岡県下でもトップクラスの水揚量を誇る漁港である。

鐘崎の道路沿いには露店が並び、のどかな春の日差しの中、漁師町の人々は祭り気分にひたっていた。

王子神社祭

去る四月三日、宗像市南郷の許斐山上に鎮座する王子神社の例祭が斎行された。

許斐山は、中世・宗像大宮司家全盛の頃に築かれた山城で、大宮司氏平が一一四〇年に築城されたといわれる。その山上に鎮まる王子神社は、まさしくその鎮守として、山城としての役目を終えた今日も、許斐嶽城址に宗像大社の摂社として鎮座している。

当日、午前十時に当大社神職が王丸区若手班長二名と共に登山口より出発。数年前に地元の方々により植樹されたと聞く満開の桜を眺めながら急な山道を急いだ。途中、ハイキングの方々と何度も会い、許斐山が地域の方々に愛されている事を改めて知った。午前十一時、山頂に到着、石造の社殿を前に下から運んだお供えを並べ幣帛料を捧げて、国家隆昌、皇室安泰、神郡宗像の平穏を祈念する祝詞を奏上した。

祭典終了後、参列の王丸地区若手班長二名の他、途中一緒になった登山愛好家の御夫婦と神酒を戴き楽しく過した。

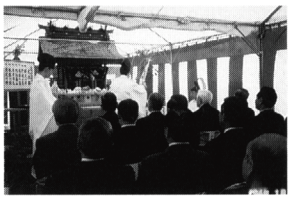
標高二七一ｍの山上からは発展する神郡宗像の姿が一望でき、山頂もよく整備され許斐嶽城址の往時が偲ばれる。

㈱新出光春祭

四月五日、福岡市博多区の㈱新出光本社ビル屋上に鎮座する宗像神社春祭が、うららかな春の日差しの中厳粛に斎行された。

午前十一時、太田宮司以下神職二名屋上の祭場へと参進、神徳の発揚並びに㈱新出光他関連会社の業務繁栄・安全と社員の無病息災を祈念する祝詞が奏上され、続いて神前に一層の御加護を頂き、社業繁栄の祈りを込めて出光豊会長・出光芳秀社長以下関係者が玉串を捧げ、祭典は滞り無く終了した。

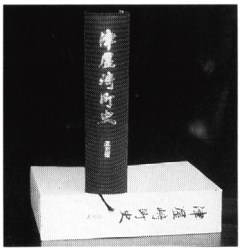
引き続き隣接して鎮座する稲荷神社を拝礼の後直会が催され、厳しい社会情況の中ではあるが、一同和やかな一時を楽しんだ。



＝神郡のたより＝

津屋崎町史「通史編」刊行

神郡宗像の一市三町一村一では、昭和六十年代より市町村史の刊行が行われている。昭和十九年六月に「宗像郡誌」が発刊されてより戦後の町村合併、更に新市政誕生などの大行政改革がなされ、それぞれの整理まとめがこの各史誌刊行につながったと思われる。



そうした中、今年三月に津屋崎町より町史「通史編」（一〇九五頁）が発刊された。同町では平成二年に町史編纂準備室が開設され、同八年三月、「町史資料編上・下二巻」を刊行し、ここに第三巻として「通史編」が発刊された。

既刊の「資料編」を基に、同町の地質時代・原始・古代・中世・近世・近代とその内容は現代に至るその郷土の発祥から発展過程が各分野に分かれ、詳細に調査研究されている「郷土歴史書」である。

山口県と地元の郷土史研究家交流

宗像大社参拝記

―大宮司氏貞公の偉業をたずねて―　装いも新たな社殿で斎行

境内の桜も色付き始めた三月三十一日、山口県内の郷土史家八名が参拝された。

この人達は、宗像市自由ケ丘在住の戦国史研究家吉永正春氏の招きにより、宗像大社を参拝されたのである。吉永氏は「筑前戦国史」を始め、「立花道雪記」などの著書も多く出版されている戦国史家である。

今年二月吉永氏は、山口市黒川の宗像邸（黒川館）跡の調査をされた際、黒川の郷土史に詳しい山根典明氏と会われてから、交流が始まったと話されている。

戦国時代、中国地方の大内家と宗像家は親族関係にあり、当社第八十代大宮司宗像氏貞は山口の黒川館で生を受けた。幼少時、父正氏（七十九代大宮司）の跡目を受け、宗像氏貞となった。戦国の世を第八十代大宮司として、又宗像一族の武将として、大社と一族を守った大宮司であった。

この氏貞公の功績を訪ね、宗像戦国史を更に深く研究する為、吉永氏が山口県を代表する八名の郷土史家をこの地に呼ばれ、当社に参拝されたのである。

正式参拝の後、一行は本・拝殿を前に太田宮司から説明を受け、現在の本殿も天正六年に氏貞公の手により再建（弘治三年焼失）されたと聞き、その想いを深く馳せられていた。

一行は当社参拝の後、氏貞公墓所や菩提寺の承福寺を参拝され、神郡の史跡を訪ねて交流を深められた。

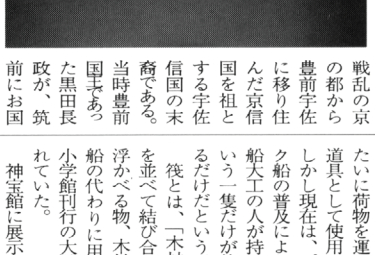
大社の奉納刀（四）

仙寿

宗像大宮司家は八十代の英傑氏貞公（一五八六年没）を最後に、後嗣なきため断絶し、秀吉の九州征伐後は小早川隆景が筑前一国を治める事となり、神郡宗像もその傘下となった。

慶長五年以降は黒田長政が引継ぎ、黒田家の統治が幕末まで続いた。黒田家は代々崇敬の念篤く、宗像の神に御供田を寄進し刀剣を奉納している。ここに掲げる「宗像第二宮」の剣は三代藩主黒田光之公の奉納である。第二宮造営記録に貞享二年（一六八五年）藩主光之信国作左衛門をして辺津宮に御剣一振を鋳造せしむ」とあるのがこれである。

この剣は昭和四十五年三月辺津宮本殿解体修理の際に床下から偶然発見された。



占領軍の摘発を恐れて隠したと思われるが、発見当時は朱塗りの鞘からなかなか抜けない程錆び付いていた。

全長七五・三糎刀身巻四・三糎先巾七・〇糎元巾五・五糎重さ一・七二瓩と大型である。剣には隷書体で「宗像第一宮」と大きく彫られ、中心表には「乙丑八月日」（貞享二年）裏に「筑前住源信吉貞」と銘がある。

研磨の際は重たいため天井から吊り下げて研ぐ等苦心して仕上げたが、錆びの割には朽ち込みや、傷も無く鍛練の良さがしのばれた。

鍛えは板目肌流れ心に良くつみ、所々に透み肌が交わっている。刀紋は僅かにのたれた沸出来の直刃を破綻無く焼き、剣先辺くに砂流しがかかっている。金銅製には横葉の紋と唐草模様が毛彫されている。

拵えには朱漆塗りで、栗形、返り角は欠失しており、柄頭、縁頭金具には唐草模様の毛彫りが施されている。恐らく失われた栗形、返り角にも同様の金具が使われていたものと思われる。

筑前信国派は、応永の頃戦乱の京豊前宇佐に移り住んだ京信国を祖とする宇佐信国の末裔である。当時豊前国主であった黒田長政が、筑前にお国替えの際に招かれた十二代信国吉貞を筑前信国の始祖とする一派であり、系図によると信国作左衛門は初代吉貞の孫にあたる刀工である。

筑前信国派は藩主のお抱え鍛治のため、折角の名刀も他藩に売買する事を禁じられ、名刀の誉れが世に喧伝される様になったのは明治維新以後だったと言われている。

宝物帖によると信国刀の奉納は十五振が記録されているが、新刀期（慶長以降安永迄）の刀で残存するのはこの吉貞の剣一振だけである。

一誌一話（76）

古代の海上航路（11）

樂　杏子

「歴史九州　四月号」に掲載されている『民具研究考十　水産大学校　立平進』を読みながら、ふと昭和五十二・三年頃、対馬から一隻の「筏」を手に入れてきたな、という思い出に耽った。

かつて「一誌一話」に対馬の筏については、書いたかと思うが、再度ここに記してみる。今、この筏は「對州筏船」と命名して、宗像大社神宝館に展示している。対馬ではこの筏をただ「木材船（デェーモクブネ）」と呼び、永い間磯づたいに荷物を運ぶ運搬用の道具として使用していた。

しかし現在は、プラスチック船の普及により、島でも船大工の人が持っているという一隻だけが使われているだけだという。

筏とは、「木材・竹などを並べて結び合わせ、水に浮かべる物、木材の運搬や船の代わりに用いる。」と小学館刊行の大辞泉に記されていた。

神宝館に展示している筏は、一本が巾十五センチの角材を七本組みとしている。長さ七・五五メートル・巾一・一メートルを計る。全ての角材には、舳先部と艫部の近くのあたりに孔を掘り抜き、平板を渡し込み、船縁の所に杭木を打ち込み筏船を造り上げている。

舳先は波切りのためか、若干山形状に作られている。

筏の舳先となる真中の角材の、船首にあたる先端部は、材を凸状に盛り上げて截り、中央に小孔を刳って着岸の時に使う縄の留め付けを作っている。

舷側いわゆる船縁には、細長い一枚の平板を張り付け、波除けとしている。

また艫台を着ける為の艫の部分は、各角材にはその部分の用途に応じて、工程過程での刳り込みによる截り込み作業を行っている。

こうして一台の船が仕上がるわけである。考えてみると沈まない大型船の誕生である。

船形船としての最古の段階である独木船は大木を伐りたおし、丸太の胴を刳って切り抜き型の船を作り、水に浮かべて乗船・使用する。

古代から独木形と同時に使われだした船は、丸太の枝抜きをしただけの材を、蔦か蔓で組んだ筏であろう。

使用目的として船というものは、一緒に輸送できるという人々の条件を全て叶えてくれた。

交通網としての道がない時代は、水に浮く物、船が最大の輸送機関である。

古代同じ時期に作られだしたと思われる筏と独木船は、筏船の方は常に水を浴び、積み込んだ荷物は水に濡れていくが沈むことはない。

もう一方の独木船は、平常は水に濡れることは無いが、雨天や時化にあうとすぐ沈没する。

各々に色々の事情と条件があろうが、大海を往来する人々が、いち早く目をつけたのは、胴部に空洞を持つ独木型よりも、木材を繋ぎ合わせた筏形船の方ではないかと思う。

なぜなら、中央に帆を張り、手で漕ぐという原始作法で行けば、沈むより濡れる方がまだ安全である。

＝奉納行事＝
奉納剣道大会

福岡県剣道連盟宗像支部平成十一年度の行事は、宗像大社奉納剣道大会で始まる。

春の長雨のこの時期境内で行われる為、例年会場の設営が心配されるが、今年は運よく雨間の開催となり、予定通り野外での試合を行う事ができた。

境内の桜も五分咲き、気温も上昇し、絶好の試合日和となった。

春の大会は団体戦である為、宗像地区の小・中学生の選ばれた部員しか出場できず、それでも男女合わせて九十チーム、四百名の選手と審判・父兄百五十名が本殿西側境内の会場に集合すると、境内も狭く感じる。

四月四日（日）午前九時より開会式が行われ、太田宮司・剣道連盟宗像支部長の挨拶に始まり、日本剣道形・神伝夢想流の居合が披露され、九時四十分に試合開始となった。

境内は終日選手のかけ声と声援で賑い、午後二時半に終了した。

試合の結果は次の通り

●男子の部

小学一・二年生

優　勝　池野剣道教室
準優勝　東部剣道教室
第三位　東郷剣道教室

小学三・四年生

優　勝　河東剣道教室
準優勝　東郷剣道教室
第三位　自由ケ丘剣道教室

小学五・六年生

優　勝　玄海少年剣道
準優勝　日の里剣道教室
第三位　東部剣道教室

中学生の部

優　勝　自由ケ丘中学校
準優勝　河東中学校
第三位　玄海中学校

●女子の部

小学生の部

優　勝　河東少年剣道教室
準優勝　南郷剣道教室
第三位　赤間西剣道教室

中学生の部

優　勝　河東中学校
準優勝　宗像中央中学校
第三位　玄海中学校

奉納吟詠大会

境内の装いも春一色となった四月四日（土）、第二十一回宗像大社春季奉納吟詠大会（主催・鶴州流　鶴州吟詠会）が清明殿において開催された。

北九州市内在住の鶴州吟詠会会員を中心とした約百名の参加者が、日頃鍛練した自慢の喉を一年に一度のこの檜舞台に披露しようと参集、先ず、午前十一時より会員一同本殿にて正式参拝、続いて鶴州会宗家・河野鶴州氏の前導により、松口月城作「宗像宮」を全員で合吟し、奉納した。参拝者も境内に響き渡る迫力ある吟にしばし足を止め聴き入っていた。

次に舞台を清明殿に移し、参加者一人一人が吟詠を披露、一般会員から準師範以上、総本部、来賓と続き、一同日本の伝統文化の素晴らしさに深い感銘を受けていた。

今大会も会員の皆さんの熱意溢れる吟詠で、日本の心が生き生きと表現された。この大会のより一層の飛躍を誓い合いながら午後四時幕を閉じた。

今回も永年斯道の興隆に貢献された方々に感謝状が贈呈された。

感謝状贈呈者は次の通り

益田　寿洲
岩本　健洲
竹井　徐洲

博多人形『勝宴の舞』奉納

博多人形師　原田勇氏

行橋市金屋在住の博多人形師・原田勇氏（七十七才）が三月二十九日当天社に勇ましい戦国武将の『勝宴の舞』と題した博多人形を奉納された。

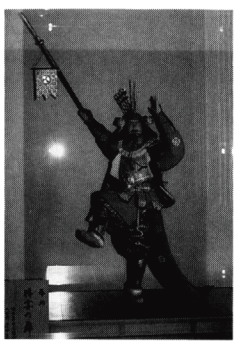
この人形は高さ八十センチを越える大型人形で、戦に勝った武将が凱旋し、神前で祝いの舞を披露する姿を創作したそうである。

原田氏は「戦国時代、武家として神郡宗像を守ってきた宗像大宮司家をイメージしました。」と話され、作品名を『勝宴の舞』と命名された。

また同氏は、博多祇園山笠で恵比須流の舁（かき）山を製作されたこともあるベテラン人形師である。

作品『勝宴の舞』は、舞楽『太平楽』を連想させるような美しい舞姿で、兜をいただき、太刀を佩き、さすがた右手には紋入りの勝旗を持っている。左足を高く上げ、勝戦の喜びを一族と共に祝う舞姿は実に見事である。

原田氏の今後の御活躍と御健勝をお祈り致します。



社務日誌抄

三月一日（月）月次祭斎行
会議・大社奨学金受給者選考打合せ校長会午後四時より於斎館
二日（火）参拝・隠津島神社安部宮司外二名来社・宗像警察署森永副署長、貪谷警備課長、橋本交通課長、田中交通指導係長転任挨拶
四日（木）来社・宗像警察署川崎警備課長新任挨拶
六日（土）参拝・出光兵庫建設保全協力会一同
八日（月）来社・宗像警察署脇山副署長新任挨拶
九日（火）若布献上奉告祭・午前九時三十分斎行、神湊魚協梶木組合長、地ノ島魚協村田組合長参列、太田宮司、杉山権禰宜の四名宮内庁へ上京
十日（水）若布献上・太田宮司外三名宮内庁、東宮御所へ玄界若布を献上
参拝・苫小牧東部石油㈱長棟春政氏外二名
十一日（木）参拝・出光エンジニアリング北海道事業所一同
十三日（土）参拝・三島光産㈱、㈱新出光新入社員奉告祭
十五日（月）月次祭斎行
十八日（木）会議・氏子会評議員会
参拝・広島県呉市、新堂平神社宮野宮司以下四十四名
十九日（金）松尾神社祭斎行、北筑柱氏組合員参列
参拝・北九州コカ・コーラボトリング㈱東福岡営業所板付所長以下三十名
二十一日（日）皇霊殿遥拝式・午前十時斎行
二十二日（月）参拝・三潴郡城島町郷土文化部九名
二十四日（水）来社・JR東郷駅三澄駅長新任挨拶
新入神職・大塚宗延、飛来孝佳着任
二十五日（木）参拝・宗像郡遺族連合会中村会長外役員一同
二十六日（金）宗像大社責任役員会開催・平成十一年度予算審議会
参拝・越峠荒神社矢田宮司
二十八日（日）参拝・大阪岸城神社阪井宮司外四十一名
二十九日（月）出向・太田宮司、神島権宮司、石橋禰宜王子神社（宗像市王丸鎮座）記帳所建設下見の為許斐山同神社登参
総代奉仕・春季大祭準備作業行われる
三十一日（水）春季大祭宵宮祭午後五時斎行、神職参籠
参拝・宮川大助氏（漫才師）外一名

神湊・江口地区
四十四賀を終えて

玄海町神湊　永島祐一

「四十四賀」とは、かぞえ年、四十四の年に「四十四の祝い」、「四十四賀」と称して小学校時代の恩師を招き、厄払い神事を受け、その後に神湊・江口地区内をパレード・餅まきをして祝賀会を行います。

これは、神湊・江口地区出身者及び在住者を対象に、百年近く絶えることなく受け継がれてきた伝統ある行事です。

平成十一年は、昭和四十四年度の神湊・江口地区の玄海小学校卒業生と結婚や転居で在住者となった、その同級生の二十人で行いました。「四十四賀」を行うにあたっては、町内在住者の六人が集まり、本年一月に「四十四賀」準備会発起人会を結成しました。会を発足させたのが例年よりも遅く、遠くに嫁いだ人や転居した人が参加してくれるのだろうか、と危惧していましたが遠くは東京、名古屋から来てくれました。

四月三日の前夜祭では、二俵の餅をついて餅まき用の袋に詰める作業も、地元の諸先輩方の熱き協力により、午前中でほぼ終了しました。

四月四日は、宗像大社での厄払い神事に始まりました。その後の江口公民館から神湊公民館までのパレード・餅まきも町内のたくさんの人の中で盛大にできました。

行事のメとなる祝賀会では、久々に顔を会わせる恩師や同級生との近況報告や昔話で楽しいひとときを過ごしました。

最後になりましたが、ご協力いただきました、たくさんの方々に御礼申しあげます。

第四五四回　宗像大社歌会詠草

大野展男　選

毎月25日〆切

大島　杉田　禮子
釣果なきこともまたよし糸垂るる時が至福の夫の休日
（評）常忙しい夫を見守る優しい眼差しがある。「釣果なきことも…」は何気ない言葉遣いだが、あたたかく親しい。その気分が四、五句でより確かとなった一首。

田久　井上　光
引き潮に松明照らし若布刈るふるさと神事に行き得ずに老ゆ
（評）詠われている神事は門司の早鞆神社のそれであろう。電車で一時間少々の処にありながら行き得ない事情は何だろうか、それゆえに一層募る望郷の念である。初句「引き潮に」が、やや説明的なのが惜しい。

福間　中村　勇
病院を終の住まひと決めし友久々見舞へば碁会にゆきをる
（評）忙しい中を見舞にきてやったのにと、少々のいまいましさと安堵感がにじんでいる結句の「ゆきをる」である。作者と友人の間柄など想像の世界がひろがり楽しい。

曲　天野　玲子
七十歳になりたる顔を写す朝明るき口紅選びてつける
（評）誰が写してくれると言っていないが、そこがいい。孫がなどとすると情がからみ俗っぽくなる。次の小田イセさんの作品と共に老いて益々元気で明るく生きる作者像が浮かびあがり、爽やかである。

池田　小田　イセ
晩年にわれが求めし国語辞典老いたる今もページをめくる

田野　森　甲子
実の生らず枝のみ繁りし蜜柑なり存分に剪り芽出し肥する

田野　森　つるの
恙なく一日暮れて仰ぐ空いつもの位置に金星光る

日の里　石松　弘次
図書館を出でし夕暮れ遙かなる山並いまだ明るさ保つ

光岡　古森テル子
啓蟄の今日の日差しを浴びながら虫も眼ざめる季かと思ふ

武丸　中村さつき
四月より老人ホームは民営化お別れ会に踊る吾らは

城南ヶ丘　中間日出子
こぼれ日を受けて登りし近き山かきたる汗に風ここちよし

福間　池浦千鶴子
しだれ咲く紅梅の香に佇める人のうしろに近づく吾は

土穴　瀧口　敦子
濃き藍に夕日のさしてひかる波玄界灘の春遠からじ

日の里　大和美由紀
故郷の景色懐かしバス停のポスターの前にしばし佇む

原町　八波　五月
共に植ゑしは十年前なり亡き人に思ひ重ぬる寒椿咲く

名古屋　小田　留子
アスファルトの欠けたる隅にひとむらのすみれ小さき蕾つけおり

名古屋　小田　喜一
末黒野にはや青き芽のここかしこ恵みの雨に応え萠え立つ

八幡西　有吉　陽子
梅の花緑の中に際立ちて白鮮けし山道ゆけば

自由ヶ丘　細川　絹子
庭石に散る梅の花地図ゑがく朝のさ庭にそそとゆれつつ

鐘崎　安永　久子
人と人命を繋ぐヘリは飛ぶ心臓移植待つ大阪へ

日の里　石松　知子
妹と土手につくしを摘みながら思い出話尽きぬ古里

大島　越智　治子
あふれ咲く庭の椿にうぐひすの鳴くを聞きたりきさらぎ尽に

光岡　河村　久光
朝明けに黒き山々連なりてそれの麓に街の灯のあり

香椎　板矢　美春
わが手にて着飾りやりし人形を孫なき吾はその髪撫づる

吉留　高山　信子
ままごとの様な楽しいわがくらし老のひとりの旅の終りよ

光岡　竹浦　葛明
寒風は天を突かせて雨降らせ潦には落葉ただよう

宗像大社歌会 俳句作品集（四三〇）

北風を避けてゲンゲの一花かな　福間　森　清

啓蟄の朝粥に輝る卵の黄　自由ヶ丘　細川　緋子

古文書館出て平成の春日かな　日の里　花田いつ枝

蠢こうと厳間を落とす春の滝　藤沢　井上　玄洋

風や春活けし椿の芽を出しき　小笹　山下しづえ

観梅行友よし酒よし日和よし　東郷　吉武　湧泉

海の色残る青さの目刺買ふ　東郷　中野　きみ

水仙や抱きて温し友の文　東郷　吉田　衿子

冬椿青磁の壺に紅映ゆる　東郷　吉田　杏子

山茶花誰もすべらぬ辻り台　東郷　三浦美千代

水温む濁さず泳ぐ神の鯉　東郷　田中　雨葉

春炉燈都知事候補の謂々を　東郷　木原　房子

（続）浜の寄物 135

いしいただし

イギリスの宣教師、ジョージ・ブラウンが一九世紀末から二十世紀初頭に南太平洋で収集したコレクションの展示が、いま大阪・千里万博公園内の国立民族学博物館（三月十一日から五月三十一日）で「南太平洋の文化遺産」として開催されている。四月はじめこれを観てきたので紹介したい。

マッコウ鯨の飾り

コレクション総数は三一六六点のうち約二千点が展示され実に見ごたえがある。南太平洋における民族文化を直下に触れることが出来るし、展示は一部ケースに入ったものもあるが、大部分は現在、当館が保存しているような状態で展示されているので、大量の物を直接見ることができることが素晴らしい。是非見学をお奨めしたい。

この資料はイギリス人宣教師ジョージ・ブラウンが南太平洋の島々で宣教活動をしながら収集したものであるが、国立民族学博物館が所蔵するまでには、実に紆余曲折を経ている。

伝道のかたわら収集した三一六六点は、彼の死後まず遺族によってオーストラリアの博物館に売却交渉したが不成立。収集品はブラウンの故郷イングランド北部のバーナード・キャスルにあるボウズ博物館に売却された。しかしコレクションの維持・管理が大変で、ボウズ博物館では一九五四年に、ニューキャスル・アポン・タインにあるキングズ・カレッジ（現ニューキャスル大学に所属）に転売、更に一九七四年にはニューキャスル大学附属のハンコック博物館に移管された。そのハンコック博物館でも三千点のコレクションの維持・管理が困難で売り出されることになった。イギリス国内ではコレクションが海外流出するのに反対運動も一部にあったが、結局、日本の国立民族学博物館が一九八六年に購入した。環太平洋の一角を占める日本に所蔵されたことは、地理的にも無関係ではなく、研究にもその場所としても最もよかったといえよう。一九世紀の南太平洋における民族文化に接し興味がつきないことであった。

ここでジョージ・ブラウンなる人物について述べておこう。ブラウンは一八三五年、イギリス北部のバーナード・キャスルに生れた。父親は弁護士だったが母親を五才の時に亡くし、学業をおえると、船乗りをしたりして職を転々としている。ニュージーランドに渡る途中の船旅で、宣教師の一団と出会い感銘を受け宗教家の道に入ることになる。オークランドのウエズリー・カレッジで神学を学び、宣教師となる。同じ宣教師の娘と結婚。サモア諸島で一四年間滞在して伝道活動。一八七四年にはニューブリテン島、ニューアイランド島での布教を計画、七六年から八一年まで滞在。一八八一年ニューブリテン島を離れて、オーストラリア・シドニーへ。八四年にイギリスに帰国。八八年から九十年三度にわたってトンガ王国紛争を調停。一八九〇年ニューギニアでの布教活動を開始。一九〇一年ソロモン諸島で伝道を行い一九〇五年、ニューギニアの視察旅行を最後に海外での伝道活動をやめる。伝道の合間をぬって島々での収集を行っている。一九一三年にはメソジスト教会のオーストラリアの協議会の会長となっている。一九一七年シドニーにて死去、八一歳だった。

南太平洋でのブラウンについてあるドイツ人コレクターは「ブラウンは福音の伝道よりも、むしろ博物の収集により関心を抱いていた」と言っている。次第に収集にとりつかれていったことがわかる。

収集と共に多くの写真撮影も行っている。当時の写真は乾板写真で、一枚一枚が丁寧に撮影され、写真だけでも貴重な資料で、伝道の記録、民族関係、博物関係と多種にわたって記録されている。収集品と共にそれら映像とを合わせて見れるので、よく理解できる。展示は装飾品、武器（弓矢・槍・棍棒類）、日常生活品、（フィジー諸島では食人の風習があり、それに関係する道具類もある。）

青柳種信著 平野国臣写 瀛津島防人日記（下巻ノ七）

八月朔日。今ふなも辺津宮にまゐらんとて、先中津宮にぬかづく。

大島より辺津宮に参るには、神湊に船よするぞ直路には、あれども、あしき病を煩ふ人多ければとて、神湊の半里ばかり西、勝浦と云地につく。爰より田島に壱里半ばかり有。

そは神湊の人家の南の辺を経てゆく也。

※いにしへ辺津宮の有し跡は、神湊の東六町ばかり、松原のうちにあり。※

直に海に臨て大島にむかひたり。※田島に宮を迂せしよしは、田島のところにしるしぬ※

此磯づたひ艮の方の崎の岬也此岬丸くして海の中にさし出たるさま、屋形の如くなればさやかた（小屋形）山ともいふとなん。

木立いとうるはしく神さびたり。後拾遺集に、右大弁通俊の筑紫よりのぼらる、道にて、

"あなし（北西の季節風）ふく
迫門の潮合に舟出して
はやくぞ過る
小屋形山を"

と読玉ひしはこゝにて、迫門のと（門）は此岬と地島の間の海（其間八丁）をいへり。

今も京に行には、この迫門を過てゆくめり。此山麓に織幡の社おはします。

宗像五社のひとつ也。

※宗像五社とは、辺津宮・中津宮・沖津宮・織幡社・孔大寺山社是をいへり。※

此社の名は延喜式にも載られたり。今いひ伝ふるは武内大臣、此やまのいとうらぐ（心細）はしきをめで玉ひて、われ身まかりなば、神霊は必ずこの地にとゞまるべしと宣へり。故後に祠を建てかの大臣を祭るといふ。社の南東のかたに、大臣の父母を祝ふ祠もあり。

葛原大明神といふ。万葉集に、

"ちはやぶる（千早振）
かねのみさき（鐘ノ御崎）"

としもよみたれば、そのかみ既に神社ませしなるべし。こゝにて御車の幡を織しめ玉ひし故に、織幡の社といふとなん。

もしくは軽嶋（応神）の御代にまゐでし兄姫によしあるか。※兄姫の社は田島の西南奴山村に、縫殿大明神とてますなり。※

又鐘の岬ともいふよしは、岬の艮五町斗に大なる鐘の海中にあり。

故郷の神宝 (46)

〈祭りの場と祭りの変遷六〉

海人族といわれる古代宗像族と、大和朝廷との合同による沖ノ島での祭りは、岩の上での祭りから露天での祭りへと祭祀形態が変化しながらも、四世紀から十世紀初頭までの六〇〇年の永きに亘り続けられてきたが、これは島国日本が一国として成立してくる、統一過程の経過の表われでもある。

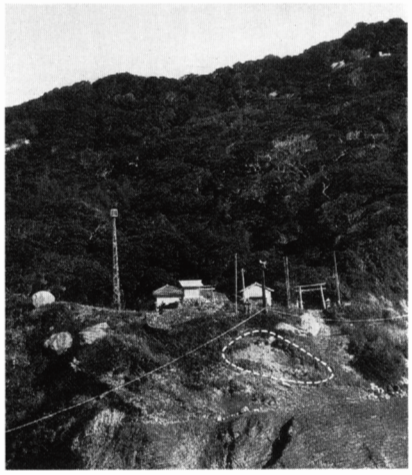
古代祭場の址から出土してくる、奉献品にもその様子が良く現れている。

大和王権による国家の成立と、対外交渉という国を上げての大きな事業の経過を、ここでもみることが出来る。

この形は大陸への路"海北道"の守護神とされた、海の神宗像大神への祈りであり、安全への願いの表現ともいえる。

古代宗像族智形君が奉斎する宗像神が、国家神へとして敬われている姿でもある。

ここでもう一度、祭祀形態と奉献品の一覧表を記していく。



※祭祀形態の変遷

I、岩上祭祀（四～五世紀）
II、岩陰祭祀（六～七世紀）
III、半岩陰半露天祭祀（七世紀後半）
IV、露天祭祀（八～十世紀初頭）

※奉献品一覧表

1、鏡（内行花文鏡・方格規矩鏡・三角縁神獣鏡・蓼鳳鏡・人物画像鏡・獣帯鏡・鼉龍鏡・乳文鏡・珠文鏡・唐製八稜鏡など）五十九面。
2、装身具（勾玉・管玉・ガラス小玉・切子玉・真珠玉・棗玉・釧類・金指輪）
3、鉄鋌
4、武器・武具（剣・刀・矛・鏃・靫・桂甲・衝角付冑・三輪玉・石突）
5、工具（刀子・斧・鉋）
6、馬具（鞍・杏葉・歩揺付雲珠・帯金具・轡・辻金具）
7、容器（唐三彩長頸壺・ガラス製カットグラス・奈良三彩小壺・銅盤・銅碗・土師器・須恵器）
8、金銅製品（龍頭・香炉状品・鈴）
9、滑石製形代（人形・馬形・舟形）
10、金属製形代（人形・舟形）
11、雛形滑石製品（儀鏡・大形勾玉・有孔円板・白玉・武器・利器）
12、雛形金属製品（無孔鏡・織機・紡織具・琴・儀鏡・盾状品・高坏・長頸壺・盃・皿・碗）
13、皇朝十二銭（富寿神宝）
14、有孔土器（小壺・杯・坩・碗）
15、滑石製子持勾玉

等と、神々へ捧げられた奉献品の品々が、美術品としても豪華であり、また多種多様な品々が十二万点にも及ぶ。この様な出土品と、永い年月に亘り続けられてきた古代の遺跡を、他の地域では見ることが出来ない。

四世紀代に入ると、日本は"倭（やまと）"を中心として統一国家形成へと胎動してくる。このあらわれは、畿内の文化圏に造成されている大形の前方後円墳が、いち早く北部九州玄界灘を眼前とする地域で築造されてきたことである。

〈松〉